

ーオーディオ史上初の波形再現スピーカーシステムについて（４）ー
＜ある「老オーディオマニア」の無謀な挑戦の物語の紹介＞

弁理士 阿仁屋節雄

スカスカのデジタル音に比べて、やっぱりぴっちり密度の濃いアナログレコードは最高じゃー！などというコエを時々ミミにする。なんでやねん？ってワケをトウてみると、デジタルは飛び飛びの信号じゃから途中が抜けてるのでスカスカのオトになるに決まっちゃうじゃろがー。その点、アナログは、完璧な連続信号なのじゃから、ぴっちり密度の濃いオトなのじゃ！なんてな、アンサーがあったりする。

この問答は、
トランジスタの音がかたいのはナーンで？
そりゃ、石じゃからかたいのはアツタリメーじゃろ！
じゃー、真空管の音がかたいのはナーンで？
そりゃ、ヒータであっためちゃうからじゃー！
てな類を思い起こさせる。

ま、オーディオを根本から自分の頭で考えなおした結果、「波形再現」に目覚めるまでは、アナログ・ピュアオーディオ狂信者であった波形再現翁もそれと五十歩百歩の認識であった。

できるだけ客観的・論理的・物理的・技術的にオーディオを一から考え直した結果、やっとアナログ洗脳から解放され、オーディオとは、ソースに実際に刻まれている「音楽波形の再現（波形再現）」である、ということになった。その視点で考えると、デジタル技術がなければ、「波形再現」など、夢のまた夢のハナシで終わらざるを得ないということであった。

ひるがえって、同じ「記録・再生」技術である「映像」の世界では、アナログテレビ時代のフラフラ・ヨレヨレ・ザラザラの画面であったものが、デジタルテレビのクッキリ・パッチリ・アザヤカの高精細画面がアタリマエになっているのである。

波形再現翁の現在の認識では、CD がデジタルテレビのクッキリ画面だとすると、アナログレコードは、アナログテレビ時代のフラフラ・ヨレヨレ・ザラザラの画面みたいなものである。

じゃー、なぜ、CD の音がやせ細った音に聴こえたり、アナログレコードの方が聴

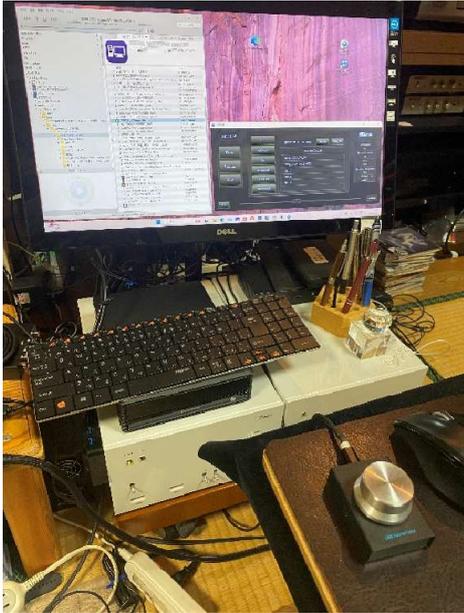
きやすくいい音に聴こえたりする場所があるのか？それは、ひとえに、音の最終出口である現状のスピーカー（波形再現率が 60%内外）が、いまだにアナログテレビ時代のヨレヨレ・ザラザラ画質のディスプレイみたいなものだからである。このようなヨレヨレ画質のディスプレイにどんな良質なソース（オーディオで言えば CD）を入力してもよれよれの映像しか映し出せない。それより、むしろ、ある種のエフェクト効果を加えたソース（オーディオで言えば、アナログレコード）を入力させた方が、いわば、風呂場効果みたいなものが発揮されて、見ごたえ感（=聴きごたえ感）が出る場合がある、ということである。アナログレコードは、そのエフェクトがかなり加えられたソースであると考えられ、ある測定では、その通りの結果（マスター音を 20%以上変形）が得られている。さらには、アンプやらを変えたら音がヨクなった、というのも、たまたまそのアンプやらによるエフェクト効果が、そのスピーカーによるヨレヨレ出音（笑；波形再現率 60%内外しかない現状の SP はみなヨレヨレ音である）を見かけ上よさげにみせる効果があったということに過ぎない。

というように、波形再現翁にかかると、これまでの世間のオーディオ感は、ほとんど身も蓋もない、ことになってしまうのである。

ナニ！それって、波形再現翁のフラフラ・ヨレヨレ頭の妄想にすぎん！ジャーナーノカー？ってー？

ま、そういうご意見も勿論アリじゃろうが、とにかく、波形再現翁の意見はわかりやせんがのー！（笑）





以上